

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL (052)853-2655 FAX (052)853-3636 <http://www.museum.city.nagoya.jp>

平成28(2016)年10月1日発行 (年4回1・4・7・10月)
3,800部発行 無料 古紙パルプ配合再生紙使用



特別展

禪

の心とカタチ

開祖 瑩山紹瑾 禅師七〇〇回
二祖 峨山留頌 禅師六五〇回 遠忌記念

曹洞宗大本山 總持寺の至宝

2016年
10月15日(土)
~11月27日(日)

The Spirit and Form of
ZEN
Treasures of Sojiji Temple

諸嶽山總持寺は、吉祥山永平寺とともに曹洞宗の二大本山のひとつです。曹洞宗の太祖と呼ばれる瑩山紹瑾(1264~1325)が鎌倉時代の元亨元年(1321)に能登国にあった諸岳寺観音堂を禅の道場に改めた事に始まります。瑩山紹瑾の門流によって、曹洞宗の禅は全国に広がって行き、それとともに總持寺は曹洞宗の中核寺院として発展して、大本山を名乗るようになりました。明治44年(1911)に神奈川県横浜市に移転し現在に至っています。

本展は、總持寺が所蔵する宝物を通じて、曹洞宗の禅を紹介するものです。あわせて両禅師ゆかりの寺院からも特別出品されます。(4, 5 ページ参照)

展覧会情報

- 会 期 ■ 平成28年10月15日(土)~11月27日(日)
休 館 日 ■ 毎週月曜日、第4火曜日(10月25日・11月22日)
主 催 ■ 名古屋市博物館・中日新聞社
曹洞宗大本山總持寺
観 覧 料 ■ 一般1,000(800)円/高大生600(400)円
中学生以下300(100)円

※()内は20名以上の団体・前売料金

※前売券は10月14日(金)まで名古屋市博物館、チケットぴあ(Pコード=767-701)、ローソンチケット(Lコード=41630)、ほか主要プレイガイドなどで販売

※名古屋市交通局の一日乗車券・ドニチエコきっぷを利用してご来館の方は100円割引。

※身体等に障害のある方または難病患者の方は、手帳または受給者証の提示により、本人と介護者2人まで当日料金の半額。

※各種割引は重複してご利用いただくことはできません。ご了承ください。

有松唐子車と前野小平治

有松唐子車とは

有松絞りで有名な緑区有松では、毎年10月第1日曜日の天満社祭礼に3輛の山車が曳き出される。そのうちの1輛「唐子車」は、もともと知多半島の東端村（現在の南知多町大字内海字東端）で建造され、明治期に有松へ譲渡されたものである。

江戸後期の東端村は、江戸-大坂間で活躍して内海船と呼ばれた海運業者たちの本拠地で、非常に豊かな経済力を有する海村であった。この東端村で建てられた唐子車には、その誕生にまつわる有名な逸話がある。唐子車は天保年間（1830～44）の製作だが、東端村には前野小平治という大富豪がいて、唐子車はもともと彼が個人的に20年かけて趣向を凝らしてつくった山車であった、というものである（伊勢門水『名古屋祭』）。

この逸話については、鬼頭秀明氏がその信憑性に慎重な態度を取っているものの（『名古屋市山車調査報告書 4 有松まつり 布袋車 唐子車 神功皇后車』）、一般的には現在に至るまで広く受け入れられているようである。

これに関して、有松唐子車の故郷である東端区のご厚意により、唐子車建造に関する直接の資料を閲覧することができた。ここでは、その内容を紹介し、唐子車建造事情の一端を明らかにしたい。

「当村祭礼車取建出金名前留」と「車金取集帳」

ここで紹介するのは、「当村祭礼車取建出金名前留」と「車金取集帳」の2冊の帳簿で、いずれも弘化4年（1847）に作成されている。

「名前留」は、弘化4年4月に祭礼車（つまり唐子車）の建造費用を村の有力者に割り当てた際の名簿である。「取集帳」は、4月の割り当てに基づいてその半金が7月9日に徴収された際の帳簿である。両者を表にしたものをそれぞれ表I・表IIとする。

表Iを見ると、東端村内の有力者たちが6組に分けられ、グループごとに分担金が割り当てられたことがわかる。番号1の前野小平治・平五郎（小平治家の新家）組が449両のうち300両と突出した金額を負担することになっている点が特徴的である。また、世話人には前野氏4名と内田佐七がなっている。

次に、表IIを見ると、世話人のうち前野氏4名の名前が見えない。これは、4名の前野氏が分担金を払わなかったことを意味するのではなく、彼らが他

の有力者たちから分担金を徴収する側、つまり唐子車建造の事務局（この帳簿の表現では「車方支配人」）を担当していたことを示す。内田佐七は当時庄屋を務めていたため世話人に名を連ねたのではないかと思われるが、ここでは他の有力者と同様に分担金を徴収されている。唐子車の建造は、少なくとも費用負担の面では東端村として合意を形成して進められた事業であったが、実際には前野一族が主導していたことがわかる。

前野小平治伝説の実像

弘化4年に用意された449両はかなりの大金であり、山車の一部ではなく全体の金額であるように思われる。また、例えば清須市西枇杷島町の頼朝車が大修復された際には、弘化3年春に事業が始まり、弘化4年4月から職人に支払う120両余りを工面し始め、同年6月に完成している（『年中行事 式冊目』『西枇杷島の山車』所収）。これを参考にすると、天保年間に20年がかりで建造されたという逸話とは異なり、唐子車の建造も実際には費用が用意される前年、つまり弘化3年あたりから事業が始まったと見るのが自然なのではないだろうか。

いずれにせよ、前野小平治が新家の平五郎とともに唐子車建造費用のうち3分の2も負担したこと、そして前野一族が実際の建造事務を担ったことは事実であり、そこには唐子車と前野小平治の特異な逸話が語り継がれる下地が確かに存在したと言える。

（鈴木 雅）

表I 「当村祭礼車取建出金名前留」

番号	名前	割当金額
1	前野小平治	300両
	同 平五郎	
2	内田七郎兵衛	90両
	中村与三治	
	内田佐七	
3	前野次兵衛	20両
4	前野清兵衛	15両
5	内田五郎兵衛	15両
	橋本長六	
	中村清蔵	
6	前野長右衛門	9両
	内田権三郎	
	松田六次郎	

世話人：前野清兵衛・同次兵衛・内田佐七・前野平五郎・前野小平治

表II 「車金取集帳」

番号	名前	割当金額	受取金（日付）
1	七郎兵衛	30両	15両（7月9日）
2	与三治	30両	15両（7月9日）
3	佐七	30両	15両（7月9日）
4	五郎兵衛	5両	2両2分（7月9日）
5	長六	5両	2両2分（7月9日）
6	清蔵	5両	2両2分（7月9日）
7	長右衛門	3両	1両2分（7月9日）
8	権三郎	3両	1両2分（7月9日）
9	六治郎	3両	1両2分（7月9日）

※帳簿の裏表紙に「車方支配人」とあり

伝えたい記憶 残したい心

現在、来年2月に行なう企画展「採録 名古屋の衣生活 ～伝えたい記憶 残したい心～」の準備の真っ最中です。展覧会では、近代から現代の間に名古屋ではどのように暮らしが変化してきたかを“衣”に焦点を当てて見ていきます。どういうときにどういう衣服を身につけていたか、どう作ったか、生計を立てるために行なった衣に関わる仕事など、多角的な切り口をテーマに、博物館に収蔵されている多くの着物や道具、そして地元の方々への聞きとりを通して紹介する展覧会です。

今回、“衣”をテーマにしたきっかけの一つが、祖母の言葉でした。昭和4年生まれの祖母に、昔はどのようなものを着ていたか聞いていたところに、ふとこのようなことを言いました。

「今みたいな衣服をとっかえひっかえする生活がずっと続くのかな。いつか昔に戻るんじゃないかと不安だわ」

祖母は衣服を店で買うことはなく、母親が作ったものやもらいものなどで間に合わせるくらしを、結婚してしばらくの間までしていたといいます。衣服を大量消費する今のくらしに違和感を感じているようでした。私の場合、小さいときからダンスの中に何十着と服が詰まっていて、店に行っては好きな服を買うことが当たり前でした。何を着るかで悩むことはあっても、着るものがなくて困ったことなどありません。まして、「この先着るものがなくなったらどうしよう…」と不安になったこともありませんでした。ですから祖母の言葉を聞いたとき、本当にびっくりしました。そしてこの言葉は、ここ何十年かでくらしが大きく変わったこと、そして人々の意識も大きく変わっていることを改めて自覚し、深く考えさせるものでした。

みなさんは持っている服の中に自分で糸から作った服がありますか？そんな人はめったにいないのではないのでしょうか。えらそうに聞いておいてなんですが、私ももちろん服を作ったことはありません。しかし、自分で麻や絹・木綿を糸に紡いで、機織りをして布にし、着物に仕立てるということは、古い古い昔のことというわけではないのです。少なくとも明治のころまではふつうに見られる光景で、それができる人も珍しくはありませんでした。

名古屋の事例でいえば、家で養蚕をしていた昭和初期生まれの方から、「出荷できないクズ繭を使って母親や姉が糸を紡いで機織りをしていた」、という話を聞いたことがあります。このころは生活で使う着物のすべてを作るというのではなく、結婚のときに持って行く着物を仕立てる、という理由で作られていました。しかし今ではまるで感じられなくなった、衣服を素材から手作りしていた面影は昭和初期ごろまで感じる事ができたのです。くらしがここ100年の間で姿かたちなく変わっていることがわかります。

素材から衣服を作る大変さは想像に難くないと思います。その仕事をするのは家の女性たちでした。何人もいる家族の衣服を作るのですから、1人あたりに多くの衣服を作ることはできません。岐阜県白川村では、昔は毎年お盆の時期に合わせて女性たちが家族全員に着物を用意したそうです。その着物は普段はもちろん、特別な日にも着ていました。この事例は、普段着・仕事着・晴着というような、機会にあわせて形状や生地を変えるのではなく、同じ着物で使い分ける（例えば新古で区別）という、衣服の古い使い方を伝えるものだとされています*。あわせて、お盆という特別な時期を選んでいるところから、衣服を新しく得ることはその労力や時間から特別なことだったともいえるでしょう。

この事例を通して、衣服を得るという意識が昔と今で変化していることに気づきます。しかし意識は変わって跡形もなくなるわけではありません。正月になると着物を一枚新しくする、新品の物をそろえる、というような事例は全国的にあり、名古屋でも聞くことができます。「今でもしているよ」という人もいるかもしれません。これも、着物を支給することが特別なことだったという意識につながっているのではないのでしょうか？

くらしが変わり、人々の意識も変わっていく今だからこそ、昔のくらしを記録することは大切です。展覧会では、くらしの変化を道具の変化だけで紹介するのではなく、人々の意識にも注目して伝えられれば、と日々試行錯誤しています。（佐野尚子）

*江馬三枝子「日常生活の衣類」『覆刻日本民俗学大系』第6巻 平凡社 1951

企画展 \ 詳細は次号で /
「採録 名古屋の衣生活 ～伝えたい記憶 残したい心～」
平成29年2月11日(土)～3月26日(日)

禅

特別展

の心とかたち

開祖瑩山紹瑾禪師七〇〇回
二祖峨山韶碩禪師六五〇回
遠忌記念

曹洞宗大本山

總持寺の至宝



The Spirit and Form of

ZEN

Treasures of Sojiji Temple

圧倒！大法被

總持寺では10月に瑩山・峨山禪師の供養のため御両尊御征忌会を開きます。この大法被は最終日の10月15日ただ一日のみ掛けられ、法会のクライマックスである總持寺貫首による大問答を荘厳に演出したものです（現在は複製を使用）。縦7.3メートル横6.7メートルの巨大な幕を精緻かつ豪華な金襴織りと刺繍とで作り上げており、染織品としては最大の国指定重要文化財です。寺外初公開であり、3週間という長期の展示も初めてのことです。



図録の写真撮影のために広げた様子



寺外初公開

重要文化財 刺繍獅子吼文大法被(部分)
江戸時代 總持寺蔵
[前期展示：10月15日(土)～11月6日(日)]
[後期は複製を展示]



重要文化財 提婆達多像
朝鮮：高麗時代 總持寺蔵

宝珠を埋め込んだ如意という法具を手にする王者の姿を表した、めずらしい図様の仏画。總持寺では法華経などに登場する釈迦の仏弟子、提婆達多として伝わる。

瑩山禪師の禅の特徴は、道元禪師の禅に密教や民間信仰の要素を取り込んで禅の民衆化を図ったことにあります。伝来する宝物も頂相（禅僧の肖像画）や墨跡（禅僧の書）といった禅宗美術ばかりではなく、密教や山岳信仰の仏像や、横浜移転後に納められた近代日本画など多様性に富んでいます。



釈迦如来坐像
中国：清時代か 總持寺蔵

横浜移転時に、本尊とされていた仏像。明治時代の外交官で不平等条約改正などに努めた栗野慎一郎が外務省にあった像を奉納したという。

多様な總持寺の禅文化

もう一つの大本山

見る・聴く・坐る



横浜市内に広がる總持寺の伽藍



重要文化財 瑩山紹瑾像
鎌倉時代 元応元年(1319)
自賛 總持寺藏

瑩山紹瑾禪師(1264~1325)は越前国に生まれ、永平寺三世の徹通義介に学ぶ。大乘寺(石川県金沢市)、永光寺(石川県羽咋市)、總持寺など各地に曹洞宗の寺院を建立し民衆を教化した。本像は禪師の生前に描かれ自ら賛を記したという貴重な肖像画。
[前期展示: 10月15日(土)~11月6日(日)]

曹洞宗の寺院は全国に約15,000ヶ寺あり、その大部分が總持寺をはじめとする瑩山禪師が開いた寺の流れを汲んでいます。そのため曹洞宗では、日本に曹洞宗の禅をもたらした道元禪師を高祖、全国に教えを広める礎となった瑩山禪師を太祖と称し両祖を祖師として仰ぎ、永平寺と總持寺を二大本山としています。高校の日本史の教科書には、曹洞宗の開祖は道元、中心寺院は永平寺とのみ記されていますが、本展ではもう一つの大本山の全容をご紹介します。

館蔵 風外本高の禅画、初公開。

風外本高(1779~1847)は伊勢国出身の曹洞宗の僧で、三河国足助の香積寺に住し教化につとめました。禅画・文人画の名手として知られ、この地方には多くの作品が残っています。本展では名古屋市博物館が所蔵する風外作品のうち選りすぐりの10点を初公開します。



風外本高像
横山雲安画・風外本高賛
江戸時代後期
名古屋市博物館蔵

■坐禅体験会

日時: 10月26日(水)、27日(木)、28日(金)
14時30分から(開場14時)
協力: 愛知県第一曹洞宗青年会
会場: 博物館展示説明室
定員: 当日先着20名
料金: 参加無料

ただし本展チケット(観覧済み半券可)が必要ですが
※当日12時30分より参加整理券を先着順に配布します(1名様1枚限り)。



関連事業

■講演会:「總持寺の歴史と宝物」

日時: 10月15日(土) 14時から(開場13時30分)
講師: 小池富雄氏(鶴見大学教授)
会場: 博物館講堂
定員: 当日先着220名
料金: 聴講無料
ただし本展チケット(観覧済み半券可)が必要です
※当日12時30分より聴講整理券を先着順に配布します(1名様1枚限り)。

■講演会:「愛知の曹洞禅」

日時: 11月12日(土) 14時から(開場13時30分)
講師: 川口高風氏
(愛知学院大学教授・白鳥山法持寺住職)
会場: 博物館講堂
定員: 当日先着220名
料金: 聴講無料
ただし本展チケット(観覧済み半券可)が必要です
※当日12時30分より聴講整理券を先着順に配布します(1名様1枚限り)。

■学芸員による展示説明会

日時: 10月29日(土) 14時から(開場13時30分)
講師: 山田伸彦(名古屋市博物館学芸員)
会場: 博物館展示説明室
定員: 当日先着100名
料金: 聴講無料

関連事業への参加にあたり障害等により特別の配慮が必要な方、坐禅で長時間足を組むことが困難な方は、当日の2週間前までに博物館にお知らせください。

家族アルバムと時代

民俗資料としての写真

家族アルバムを記録する作業を続けている。具体的には、アルバムに含まれる写真を写真の専門職員と一枚一枚撮影し、写真に付随する書き込みなどの情報を記録する作業である。

これまで、名古屋市内の数軒のお宅からアルバムをお預かりしてきた。いずれのお宅にも、カメラを持つことが一般的でなかった昭和20年代以前からの写真が残っており、アルバムの冊数もかなりのものになる。そして、それらのアルバムには、様々な生活の場면을写した写真が含まれる。

民俗学を専門とする私自身の関心からいえば、古い写真の魅力は、生活の様子についての情報が含まれている点にある。

たとえば、アルバムには、冠婚葬祭の一場面を写した写真が含まれていることがあり、祝言や葬儀の様子を確認することができる。また、半被を着た子ども、食卓に並んだちらし寿司のような家庭にとっての祭礼の写真、戦火で焼失した山車のように現在では失われたものが写る写真も興味深い。

アルバムには特別な日だけでなく、日常の生活を撮影した写真も含まれる。普段の服装や食事、室内の様子などは、記録に残ることが少なく、貴重な情報である。

写真自体に含まれる情報だけでなく、写真にもとづいた調査も重要である。質問や会話を通じて、過去の生活や伝承されてきたことを記録する聞き書き調査の際、写真を介したやりとりは、とても具体的なものとなる。共通の経験がない中で、質問をしたり、お話をうかがう際に、視覚的に共通する写真は非常にありがたい存在である。



写真1 秋祭り 昭和29年 西区名駅 個人蔵



写真2 クリスマス 昭和32年 西区浄心本通 個人蔵

家族アルバムの意義

アルバムの写真の記録を始めた当初は、民俗に関する情報、あるいは昔の名古屋についての情報が含まれているか判断し、博物館での活用の可能性について考えていた。その時点では、個々の写真の情報に注目していたわけである。

しかし、数十年前のアルバムを見続けているうちに、アルバムの意義についても考えるようになった。それは、撮影をしていた写真専門の職員とアルバムの写真について話をしていた時のことである。写真をきっかけに、生き生きと語られる職員自身の幼少期や家族についての話は、県外の旅行や人物に焦点を当てた記念写真など、それまで注目していなかった写真にも及んだ。

おそらく多くの人は、その時代のアルバムを前にした時、自身の思い出に置き換えながら写真を見るのではないだろうか。それは、多くの写真がまとめられるというアルバムの性質だけでなく、その内容が多くに家族に共通するできごとによって構成されているという特徴によると思う。

個々の家族によって違いはあるかもしれないが、昭和30年ころから家族旅行、デパートや動物園での行楽、誕生日やクリスマスなど多くの行事が家族の行事として定着した。それは、だんだんとカメラを持つことが広まってきた時期と重なり、それぞれの家庭で家族アルバムが制作されてきた。

それらの同時代的に共有されたできごとをおさめた家族アルバムは、個人にとっての思い出というだけでなく時代を振り返るきっかけになる資料としても価値があるのだと思う。

(長谷川洋一)

記録作業の成果をふまえて

フリールーム「家族アルバムの昭和」を開催します。

9月28日(水)～10月23日(日)

呉服のふるさとと絹織物文化

呉服のふるさと

——三十七年春二月戊午朔、阿知使主・都加使主を呉に遣して、縫工女を求めしむ。(中略) 呉の王、ここに、工女兒媛・弟媛、呉織、穴織、四つの婦女を興ふ。(『日本書紀』巻第十・応神天皇紀)

およそ1600年前、中国の「呉」(江南とよばれる長江下流地域一帯)から、当時は古墳時代だった日本に、機織りの技術をもつ4人の女性が派遣されてきたといえます。日本で和服のことを「呉服」とよぶのは、その原形が「呉」から伝わった服だからであるといわれています。その伝承がしめすように、中国江南は古来、養蚕・絹織物が特産でした。その歴史は世界最古で、浙江省湖州市の銭山漾遺跡で出土した約4700年前の平織り絹織物にまで遡ります。

世界無形文化遺産・南京雲錦

さて、かつての「呉」に位置する南京に、今も「雲錦」という伝統的な高級絹織物をみることができます。その名称は錦織りの生地や色彩が雲霞のように美しいことに由来するといわれ、四川省成都の「蜀錦」、江蘇省蘇州の「宋錦」と並ぶ“中国三大名錦”の一つです。2009年から「南京雲錦の職人技術」として世界無形文化遺産に登録されています。

雲錦は金糸や孔雀の羽なども用いて、材質、色彩、文様意匠の華麗さを極めた絹織物です。元朝(13～14世紀)以降は歴代皇室の御用達品の絹織物として生産され、皇帝専用の龍の文様をあしらった衣服や冠をはじめ、皇后・皇室一族の衣装まで、多くが雲錦で製作されました。元朝は南京に朝廷直営の工房を設置し、これが明・清朝まで継承されました。

雲錦は、「大花楼提花織機」と呼ばれる高さ4m、長さ5.6m、幅1.4mもの巨大な木製の機を用い、機の下二人組で縦糸と横糸を操りながら織っていきます。非常に複雑な文様も、刺繍ではなく織りで作り上げるため非常に高い技術を必要とし、熟練工でも1日にわずか5～6cmしか織ることができず、1着の衣服を仕上げるのに2～3年かかるそうです。

南京雲錦が生み出した文化

元朝末期から明朝にかけての頃、「南京白局」という民間芸能が生まれます。雲錦生産の多忙で疲労にまみれる労働のなかで、工人たちが気分を紛らわ



雲錦の織機「大花楼提花織機」

すために民謡歌謡を独特の節回しと南京方言で歌い始めたのが始まりといえます。これを街頭や祝いの席で演じて見せたのがやがて人気を博し、専断的な劇団を形成するまでになり、南京の民間伝統芸能として根付いていきました。

清朝の時代には、南京に「江寧織造局」という雲錦専門の官署が置かれました。18世紀の作家、曹雪芹は、江寧織造局を主管する名家に生まれ、織造局での生活を舞台にして、上流階級の人々の生活ぶりとともに、主人公と2人の女性を取り巻く三角関係を生き生きと描いた小説『紅樓夢』を著しました。『紅樓夢』は中国四大名著に数えられ、現在も多くのドラマや演劇などに仕立てられる有名な作品です。

このように雲錦は、それ自体の工芸的価値が貴重なだけでなく、皇室との関わり、民間芸能、文学など、南京を彩る文化を生み出した源でした。つまり、雲錦は、少なくとも元朝以来約800年間の南京の特徴的な文化全体を象徴しているともいえます。

また、雲錦などの中国絹織物は、明朝以後、貿易などを通して日本にももたらされました。それらは「名物裂」とよばれる舶来の高級染織として愛好されました。一方で中国の明・清でも、日本の近世の絹織物が「倭緞」とよばれて珍重され、双方の技術やデザインは互いの絹織物生産に新しい刺激や影響を与え発展させました。中国江南に発達した絹織物と日本の呉服文化は、時代を超えて重ねられてきた素晴らしい日中文化交流の証でもあるのです。

(藤井康隆)

10月26日(水)～12月4日(金)の間、フリールームで開催する「中国明清の絹織物」で、今回の話題と関連する資料を展示します。ぜひご覧ください。

資料紹介

伊勢湾の環境からみた漁具
(下之一色漁業資料)

陸の上からは直接見えないが、海底には様々な地形があり、多様な生きものが生息する。

このような海の世界について知るには、地質や地形のような環境と漁具の関係について考えることも有効な手段である。

多様な漁法

伊勢湾にはウナギ、エビ、カレイ、コノシロ、アサリなど多様な生きものが生息しており、これに対して様々な漁がおこなわれた。

現在の名古屋市市内にもいくつかの漁港があり、下之一色、熱田、笠寺などの漁業協同組合があった。その中でも、規模が大きかったのは下之一色である。

大正10年の「漁具別漁獲統計」には、当時の下之一色で21種の漁法がおこなわれていたことが記される。その中で、網漁だけを見ても、船を推進させて網をひく漁（打瀬網漁など）、魚群を包囲した網の範囲を縮小して捕獲する漁（揚繰網漁など）、網を張って捕獲する漁（刺目網漁など）をはじめ様々な漁があった（野田兼一著『愛知之水産』大正11年発行）。

写真1は昭和期まで、下之一色の漁師が網漁に使用した漁具の一部である。網にイワと呼ばれるおもり、アバと呼ばれる浮きを付け、漁法によって「根石」、「明る桶」、「みうら桶」などを使用した。



写真1 網漁で使われた漁具

海的环境と漁具

下之一色で漁師をしていた犬飼一夫さんによると、漁師は海底の地（地底）のことを知らなければならぬという。



写真2 様々なイワ（おもり）

それは、地質や地形によって、生きものの種類や生息する場所が異なるためである。

伊勢湾の海底の地質は、主に砂と泥であり、砂地にはエビや貝類、泥地にはウナギやアナゴなどが生息した。

地形をみると、伊勢湾は遠浅の海であるが、陸の近くの浅い砂地から急に水深が深くなり泥地になる場所がある。このような場所はダンナリ、ダングチなどと呼ばれ、多くの魚が生息する場所であった。また、川の流れ込んだ先に、タカヤセと呼ばれる浅い砂地がある。川の水と海水が混ざることあつて、多くの貝や魚が生息した。

漁師は海上の見通しによって（ヤマを見て）海上での位置、海底の地形や地質が分かるという。それらの知識は長年の経験にもとづくものであり、漁場に適した道具を使う。写真2は網の下部に付けるイワ（おもり）であり、漁の種類や網の大きさに合わせてイワを使った。（①②打瀬網や刺目網など、③エビ流し網など、④エビ待ち網など、⑤揚繰網や三枚網など、⑥三枚小網など）

同じ打瀬網漁でも、泥地では沈まないように①のイワを使い、砂地では②のイワを使った。地によってイワ（の付いた網）を使い分けるので、漁に出るときは、一色（1種類）だけでなく、編み目やイワの大きさが異なる網を幾色も船に積んだ。

また、魚群を発見して網を広げる漁（揚繰網漁など）では、より早く網を沈めるため、一定の場所に網を張る漁（三枚網漁など）では、網を固定させるために④⑤⑥のような鉛のイワを使う人もいたという。

これらの漁具は使われなくなったが、そのはたらきを調べることは、海の世界を知ることにつながる。それは自然環境に対峙した人の営みであり、陸からみてもう一つの世界を知ることでもある。

（長谷川洋一）